



Data	2024-2
監督・脚本：アキ・カウリスマキ	
出演：アルマ・ポウステイ／ユッ シ・ヴァタネン／ヤンネ・フ ーティアイネン／ヌップ・コ イヴ	

## みどころ

「枯れ葉」と聞けばシャンソンの名曲を思い出し、シャンソンと聞けば、その本場はフランスだ。ところが、本作はフランス映画ではなく、フィンランド・ドイツ映画。しかも、フィンランドの有名なアキ・カウリスマキ監督が“引退宣言”を撤回してまで撮った最新作というから、こりゃ必見！

若き美男美女の純愛モノもいいが、たまには不器用に社会の底辺で暮らす孤獨な労働者同士のラブストーリーにも、目を向けたい。ロシアによるウクライナ侵攻を伝えるラジオニュースが流れる中、フィンランドのカラオケバーではじめて出会った中年男女の出会い？その進展は？

それがスムーズに進まないのは想定通り。しかし、この中年男がアル中とは！しかも、ここまで運に見放されている男とは！こりゃダメだ！と見放しかけたが、その中で生まれてくる奇跡的な結末に注目！これぞ弱き者、貧しき者にトコトン寄り添う（？）アキ・カウリスマキ監督の真骨頂！

## ■この監督に注目！引退宣言を撤回してまで本作を！■

私はフィンランドの映画監督、アキ・カウリスマキの名前を『希望のかなた』（17年）（『シネマ 41』273頁）を観て、はじめて知った。作家の村上春樹は「フィンランドと聞いて真っ先に思い浮かべるのはアキ・カウリスマキ監督の映画」と言っているそうだから、彼の名前（名声）は日本でもよく知られているらしい。そんな彼の『希望のかなた』は、「港町3部作」から「難民3部作」と名を変えた、心温まる映画だった。

近時、北欧映画は『幸せなひとりぼっち』（15年）（『シネマ 39』243頁）、『ヒトラーの忘れもの』（15年）（『シネマ 39』88頁）、『ここに剣士を』（15年）（『シネマ 39』239

頁) 等で有名だが、突然の“引退宣言”を撤回し、『希望のかなた』から5年ぶりにアキ・カウリスマキ監督が発表したフィンランド映画の出来は？

## ■□■「枯葉」と「昭和枯れすすき」との共通点は？■□■

「枯れ葉」と聞けば、私はすぐにジュリエット・グレコが歌ったシャンソンの名曲『枯葉』を思い出す。また、シャンソンと言えばその本場はフランスだ。ところが、本作のラストにはその名曲が流れるが、本作はフランス映画ではなく、紛れもなくフィンランド・ドイツ映画だから、そこを混同しないように。しかし、なぜ本作の原題が『Kuolleet lehdet』、邦題が『枯れ葉』なの？

日本では1974年にさくらと一郎が歌った『昭和枯れすすき』が大ヒットしたが、それは一体なぜ？私の音楽センスでは、シャンソンの『枯葉』と昭和歌謡の一つである『昭和枯れすすき』は一種よく似たもの（通じるもの）があるが、その音楽センスが正しければ、アキ・カウリスマキ監督が本作のタイトルを『枯れ葉』としたのは大正解だ。

## ■□■タイトル通りの中年男女のラブストーリーに注目！■□■

若い男女の“ピュアな純愛モノ”は古今東西を問わず魅力的だが、邦題を『枯れ葉』とした本作は、孤独を抱えながら、またギリギリの生活状況、経済状況の中で生きる中年男女のラブストーリーだ。そんな映画の一体どこが面白いの？そう言いたくもなるが、『枯れ葉』というタイトル通りの中年男女のラブストーリーもそれなりの味があるので、その展開に注目！

そのヒロイン(?)は、働いているスーパーから賞味期限切れの商品を持ち帰ろうとしたことがバレて解雇されてしまった女アンサ(アルマ・ポウスティ)。他方、カラオケバーでそんな女アンサとはじめて出会い恋心を覚えた男は、工事現場で働いている男ホラップ(ユッシ・ヴァタネン)だが、この男、勤務中にコソコソと酒を飲まなければならないほどだから、かなりのアル中・・・？そんな出来の悪い男(?)でも、一見不愛想ながら、それなりに可愛い女アンサから電話番号を書いたメモをもらったまでは上出来だが、そのメモを失ってしまうと・・・。

## ■□■フィンランドの生活ぶりは？とりわけカラオケバーは？■□■

本作が2023年製作の映画であることは、アンサの部屋にある唯一の情報源たるラジオから、ウクライナ情勢を伝えるニュースが再三流されることからすぐにわかる。しかし、1950年代の、「鉄のカーテン」によって隔てられていた「東西冷戦」の時代の“東側”ならいざ知らず、今や“NATO”の一員としてはっきり西側民主主義陣営に参加しているフィンランドでも、テレビのない生活をしているの・・・？リビングルームに85インチ、75インチ、70インチの大型テレビ3台を置き、そのそれぞれにレコーダーをセットしている私にはTVのない生活は考えられないが、フィンランドで一人暮らしをする中年女にはラジオ1つあれば十分なのかもしれない。しかし、底辺の労働者として毎日懸命に働く彼女の生き甲斐は一体何？

他方、ホラッパと一緒にカラオケバーに行った友人男性の歌唱力には驚かされたが、それ以上にフィンランドにはこんなスタイルのカラオケバーがあることにビックリ。中国旅行で行った際に訪れた、上海や北京のカラオケルームの日本のカラオケとは段違いの広さ、豪華さにも驚かされたが、フィンランドにあるこんなスタイルのカラオケバーもかなり魅力的だから、びっくり！その他、本作では、私が全く想定していなかった生の演奏や生の歌声を何度も聞くことができるので、それにも注目！

## ■□ダメ男の恋物語はこんなモノ？この不運にビックリ！■□

ホラッパのようなアル中男が女から嫌われるのは当然。それはホラッパ自身がよくわかっていたが、自力でのアル中の克服は大変だ。したがって、本作では、アルサのためにアル中の自分を治さなくてはと懸命に努力するホラッパの姿が感動的だ。さらに、不器用なホラッパが、アルサのためにそんな努力をすると宣言することもないまま、一人黙々と努力を続ける姿も感動的だが、残念ながらその成果はイマイチ・・・。

そううえ、トコトン不運な星の下に生まれているとしか言えない男ホラッパが、ある一大決心の上でプレゼント用の花束を持ってアルサの自宅を訪れようと家を出たところ、その途端に車に轢かれてしまったからアレ・・・。

## ■□記憶喪失！その中から生まれる“人生いろいろ”ぶりは■□

世の中は実力次第。それが80%の真実だが、実は20%は運もある。宝くじに当たったり、競馬で万馬券に巡り合うのも運のうちだが、その人がいい運を持っているか、それとも悪い運しか持っていないかは、実はその人の生き方が前向きか否かにかかっているものだ。そんな私の考え方からすれば、職場でもコソコソと酒を飲み、それがバレてクビにされると悪態をつくようなホラッパの生き方に運がついてくるはずがないのは当然だ。なんとか入院できたのは幸運だったが、記憶喪失によってアルサへの恋心も忘れてしまったのは、ある意味でラッキー・・・？

他方、突発の交通事故のために突然目の前から消えてしまったホラッパの消息をアルサが知ることができたのは、一体なぜ？それはアルサにとって大きなラッキー・・・？それとも大きな不幸・・・？そこらあたりが人生論として面白くかつ難しいところだが、アキ・カウリスマキ監督が『枯れ葉』というタイトルで描く本作の結末は、それなりに感動的なものになっていくので、それに注目！今は亡き日本の歌手、島倉千代子はヒット曲『人生いろいろ』（91年）で、「人生いろいろ 男もいろいろ 女だっていろいろ 咲き乱れるの」と歌ったが、さてアルサという女の“人生いろいろ”ぶりは・・・？

2024（令和6）年1月5日記